

一月一日の朝。

正確には、この時間帯を元旦と呼ぶらしい。

人によつては日付が変わる前から神社に繰り出したり、初日の出を見に行ったりするよ  
うだが——冗談じゃない。

この寒い中を外出したり、わざわざ太陽が昇る瞬間を見に行く気持ちだが、まるで理解出来  
ない。

否定はしないが、まったく共感は出来ない。

暖かい部屋で自堕落に過ごし、昼まで惰眠を貪る権利を放棄するなど、正気の沙汰と  
は思えない。

一年の計は元旦にあり。

元旦を穏やかに過ごさずして、一年を穏やかに送る事など出来るはずがない。

だから——寝る。

とまあ、そんな大義名分を掲げていた訳なのだが……。

10 戦目

『兄妹の関係』

「……………」

俺の名前は橘アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

率直に言って——俺は動揺していた。

何から説明すべきだろう。目の前の光景からか？ いや、現在の我が家の状況からだろうか？

よし。とりあえず、そこからだ。

我が家には俺と妹のカナコ、そして親戚で居候の三姉妹が生活しているのだが、彼女等は実家に帰省しており、今年俺とカナコの二人きりでの年越しとなった。

特に何をするでもなく、普通に二人で過ごし、普通にそれぞれの部屋で就寝した——はずなのだが、目が覚めたら、なぜかカナコが目の前で静かに寝息を立てていた。

以上、説明終了。

橘アサト先生の次回作にご期待ください。

……違う。落ち着け、俺。お前は漫画家でもラノベ作家でもない。

昨夜の記憶を辿る。一応、蕎麦だけは食べて、除夜の鐘が遠くに聞こえるのを確認し、『明けたな』『明けましたね』とカナコと言葉を交わし、珍しく早めに寝たのだ。そうであれば、朝に自然と目が覚める事など滅多にない。俺が寝ると告げたら、カナコも自室に向かった。間違いない。

部屋を見渡すが、俺の部屋だ。という事は、カナコが寝ぼけて俺の部屋に入って、そのまま寝てしまったのだろうか？

いや、違う。カナコは寝間着ではなく振袖を着ている。寝ぼけて着られるものではないだろうから、一度起床して着替えたはずだ。

という事はあれか。『起こしにきたんだけど、お兄ちゃんの寝顔を見てたら、つい私も一緒に寝ちゃった。てへ☆』的なあれか。

なるほど。カナコは何時の間にか萌え妹キャラになっていたのか。お兄ちゃん、びっくりだ。

……違う。落ち着け、俺。お前はそんなラブコメ脳だったか？ 現実と虚構をこっちやにする奴だったか？

「……………」

などと考えていると、目の前の萌え妹キャラ——もとい、カナコが目を覚ました。

「おはようございます、兄さん」

きょとんとしたのも一瞬、すぐに状況を把握したのか、カナコは微笑を浮かべて朝の挨拶を告げた。

実の妹をこんな風に言うのもなんだが、とても可愛い。どちらかといえば綺麗なタイプなのだが、無防備な笑みを向けられると、可愛らしいと感じてしまう。

「おはよう……で、なんで俺のベッドにいるんだ？」

俺は努めて平静を装った。妹が平然としているのに、俺が取り乱す訳にはいかない。

お兄ちゃんだもの。

「それが、起こしに来たんですが、眠っている兄さんを見ていたら、つい……ふふ」

と、口調こそ違うものの、カナコは俺のラブコメ脳に住んでいる萌え妹キャラと同じような事を言って、少し恥ずかしそうに笑った。

うん、可愛い。

他人と接する際のカナコは無表情で淡々としているが、俺に対しては基本的にこんな感じだ。

だが、今日のカナコは普段以上に可愛らしいというか、どこか艶つぽく、妙にドキドキしてしまふ。カナコの着ている白い振袖の効果か。それとも、ベッドの上という場所に加え、二人きりで至近距離という状況のせいか……。

「んっ……」

カナコが上半身を起こす。着崩れた振袖の両肩が開き、胸元が大胆に開ける。前屈みになっっているため、たわわな膨らみが左右から圧迫され、強調される事で実際のサイズよりも大きく見える。いや、実際のサイズなど知らないが。

「……………」

いけないと思いつつ、視線が引き寄せられる。豊かな双丘が描き出す魅惑の谷間。悲しいかな、こればかりは男の性なので許してほしい。

それに、相手は血の繋がった実の妹なので、問題はない。民事で解決するような事案には発展しない。同じ屋根の下で暮らしていれば、着替えを見まうくらいは日常茶飯事。もちろん、相手は妹なのでラッキースケベで shouldn't。ただの事故だ。これも同じ。

「……兄さん。嫌ではないんですが、そんなにじつと見られると、さすがに恥ずかしいです——」

頬をほんのりと赤く染め、カナコは窺うような上目遣いで俺を見て言った。責めるようなニュアンスはなく、むしろ、満更でもなさそうな、どこか嬉しそうにも見える表情で。

「——そうだ。こうしてしまえば……」

「っ!？」

思いついたとばかりにカナコが密着してくる。柔らかな胸が俺の臍辺りを、やんわりと圧迫する。確かに、こうすれば見えない。

だが、密着される事で身体が物理的な刺激を受け、俺の鼓動は早鐘を打つ。胸元に顔を寄せているカナコには聞こえてしまっているだろうと思うと、無性に恥ずかしいというか、情けないというか……。

「……兄さんの心臓、ドキドキしてます」

しなだれかかる姿勢で、俺の胸元に顔を寄せているため、少しくぐもったカナコの声が俺の耳をくすぐる。

「私にドキドキしてくれているんですね……嬉しい」

見下ろせば、カナコの表情は恍惚とした。

「私も、すぐドキドキしています」

カナコが顔を上げる。

近い。

「本当はずっと、こうしたかった」

間近に愛おしい少女の顔があつて、でもそれは妹で、慈しむ対象ではあつても、異性として愛する事などあつてはならない。

それは禁忌だから。

「もっと近づきたかった」

遣伝子の多様性を阻む行為。

生物の理に対する反逆。

だからこそ、人間は本能的に家族を異性と見る事をせず、近親相姦は世間から蔑視されてきた。

「兄さんに触れたくて、兄さんに触れてほしくて……ようやく叶いました」

蕩ける寸前のような笑みを浮かべるカナコだったが、目尻には薄っすらと涙の粒が浮かび、今にも零れ落ちそうだった。

カナコも判っているのだ。これ以上はいけない、これで終わりにしなければ——と。でない、もう兄妹ではいられなくなってしまう。

「カナコ——」

「あ……」

卑怯だと判っていて、俺はカナコを抱きしめた。こうしてしまえば、顔が見えなくなつて、妹のせつない表情を見なくて済む。その場凌ぎで、なんの解決にもならない、問題を先送りにするだけの行為。

「……ごめんなさい。兄さんを困らせるって判ってるのに、私——」

それでも、カナコは俺を責める事はせず、逆に自分を責めてしまう。



俺の背中に腕を回し、抱擁に伝えてくれる。

温かい。妹の体温が、よりはっきりと伝わってくる。

「私、なんだか眠くなってきました」

どのくらいの時間が経っただろうか。俺は仰向けになり、カナコに左腕を枕にされるような格好になっていた。

「ん。もうひと眠りするか」

そうして、何事もなかったように起床して、また俺達は何事もなかったように、普通の仲が良好だけの兄妹に戻るのだ。

「はい。おやすみなさい——兄さん」

「ああ。おやすみ——カナコ」

瞳を閉じて、腕の中の温もりは消えない。

そして、妹に対する気持ちもまた、消える事はないのだと思う。

Mission complete

## あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』十戦目をお届け致します。

去年から看板娘となりましたカナコですが、当然ながら妹キャラなので、扱いは慎重にならざるを得ません。どれだけ妹キャラが認知され、ヒロイン格になったとしても、結局『義理の妹』だったり、サブヒロインだったりで、ガチの妹が正ヒロインになる事はありません。まあ、倫理的な問題があるので仕方ありませんが。

しかし、これは僕の個人的な趣味で書いているものなので、実の妹と結ばれても問題ありません。文句を言われる謂れいわはありません。ただ、他のヒロインもいる以上、ここでカナコがアサトと結ばれてしまったら、ラブコメは終わってしまうし、本当にハーレムにしてしまうのも面白くない。なにより、『実の妹であるが故の葛藤ゆえみたいなものを描く方が、背德的で萌える……！』というような結論に落ち着きました。『落第騎士の

キャバल्ली英雄譚』のサブヒロインで主人公の妹・珠雫しずくみたいな。

けど、結ばれちゃうのも書きたくて。肉体関係もあって、もっと背德的なやつ。

でも、『ツバキヒメ』も止まってるしなあ……。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。妹に興味がない方に、少しでも良さを感してもらいたい……そのために僕は小説を書いています。あとは人外ヒロインとかロリ巨乳とかヤンデレとか、もちろんクールビューティも！

普通じゃないヒロインが好きでもいいじゃない。

2017 / 12 / 28 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る